



『どうすべきでしょうか?(2)』

聖書:使徒の働き1:8-11/暗唱:伝道者の書12:13-14

説教: 鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

<1. 人生のフォーカスをもう一度神に置き換えましょう。>

先週使徒の働きの始めの講解としてメッセージをさせていただきました。我々の罪を贖うために十字架に死なれ、三日目によみがえられたイエス様は昇天される40日の間、弟子たちと会って、いろんな話をされました。

どんな話をされたのでしょうか?使徒の働き1章3節で“イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現われて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。”と書かれています。なぜでしょうか。イエス様はいつまでも弟子たちと一緒にではなく、まもなく天に昇られるからであり、残された弟子たちがイエス様のされた働きを続けなければならないからです。

イエス様が弟子たちに語られた内容は“イエスは復活された”ことと“神の国のこと”についてでした。これはイエス様の関心事はこの世ではなく神の国であり、私たちも神の国について関心をもつべきであるという意味です。

そして1章8節、昇天される前、最後に弟子たちにこう言われます。

“しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。”

この御言葉によって分かる大切な核心はなんでしょうか。我々には力が必要とされているが、その源泉は聖霊様であるということです。つまり、政治的に、自分の有益などを計りながらまわりや、環境に関心をもっていた弟子たちにイエス様はいまあなたがたのフォーカスを神に再び置き換えなさいと命令されたのです。もう一度神様だけに焦点を合わせなさいという意味なのです。

神様の力を受けるためには人や環境みたいなところにあちこちしきりにのぞくのではなく、ただ聖霊に頼らなければなりません。神様に焦点を合わせるために我々ができることは御言葉と祈りしかありません。そういうわけで、我々は神様の御言葉にいつもとどまるべきであり、いつも祈りの座から離れてはいけません。

イエス様の弟子たちもエルサレムの奥まった部屋で少なくとも10日間（とおかかん）ほど集中的に祈らされたと思います。いつ約束された聖霊が臨在されるのか確約（かくやく）されてない状況で、神の約束が答えられるまで、ただ神様だけをみあげ、集中的に祈りました。私たちも乱れている心をもう一度つかんで神様に集中し、聖霊を望むとき、神様の恵みと力を経験されると信じます。

ある人たちは困ったとき、周りの人々に訴えます。人々をつかんで訴えるなんて答えが出るでしょうか。むしろその人はうわさだけを散らばっていくでしょう。そして、居酒屋に行き行って訴えるなんて何が良いでしょうか。酒代だけがさらに掛かってしまうだけでしょう。我々が訴えるべきところは一つしかありません。それは全能なる神様に叫び求めるときこそ答えがあると信じます。

“わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。”(エレミヤ33:3)

最近、みなさんの人生の焦点はどこに合わせられていますか。自分の固執や、ほかの人々に合わせないで、問題に焦点を合わせないで、神様に合わせる時ようやくみなさんが力を得、問題が解決され、答えられる恵みをいただけると信じます。

本文の 8節をもう一度読んで見ましょう。

エルサレムから福音化が始まります。使徒の働き1章-7章まではエルサレムでどうやって福音が伝えられ、どうやって教会が立てあげられたかをよく表してくれまます。エルサレムの福音化の後、次の段階として‘ユダヤとサマリア全土’の福音化がみられます。使徒の働き8章1節から11章18節までがその内容です。

その次はどこですか? “地のはてまで”です。地の果てまで福音が宣べ伝えられると言われました。これは11章19節から何章まででしょうか。その末はまだありません。つまり使徒の働きは28章で終わらないで、いまもなお続いているのです。イエス様が再臨されるその日こそ最後の章になるでしょう。ですから、使徒の働きからはじめ、地の果てまで福音が届けられるその日まで神様の国のことは決して中断されないと信じます。

ですから、我々ももう一度我らの信仰を引き締めなければなりません。‘聖霊のバプテスマを受ける’ということは聖霊がただ、自分に内住されてすこしずつ働かれることではありません。我々に満ち溢れるほど満たされることを意味します。自分の考え、自分の言葉と行動、自分のすべての領域において神の力と恵みで満たされます。水をたくさん飲んで、水でいっぱいになったときおなかを押すと水が口から出てくるように、聖霊に満たされると我々のすべての言葉や考え、行動を通して御霊のすばらしい力が表され、恵みを与え、御霊のすばらしい実が表されると信じます。

イエス様は弟子たちに決していろんなことをするように命じたわけではありません。神の国のためにたくさんの方を計画して、たくさんはたらくべきであると言われませんでした。ただ、エルサレムとユダヤとサマリア全土、地の果てまで私の証人となると言われました。イエス様はまず、弟子たちがいる近いところから伝えることを進めました。弟子

たちにおいてエルサレムとユダヤは近いところでした。しかし、けっしてそこだけでとどまってはいけないことを同時に教えてくださっています。イスラエル人でも、ほかの民族にも関係なく、さらに、敵対しているいやな人々にさえも差別しないで、福音を伝えるようにと命じられたのです。サマリアはイスラエル人にとっても一番いやな人々でした。イエス様は福音を伝える対象を自分で制限しないで、差別しないようにと気をくばってくださいました。そして、地の果てまで福音を伝えるようにと命じられました。なぜなら、この世においてイエスキリストによらなくては自力（じりき）で救われる人はだれもいないからです。

もちろん、これは自分の仕事、やるべきことをすべてないがしろにして伝道だけしなさいということではありません。我々にまかされているすべてのことにおいて我々の使命、我々の人生の目的がイエスキリストという福音の証人となることであることを教えて下っています。クリスチャンがほかの人より、熱心に、誠実に働くべき目的が、学生が信じてない学生たちよりもっと熱心に勉強すべき目的が、頑張ってお金を稼ぐべき目的がほかの人を助け、仕えること、我々のすべての奉仕と仕えるべき目的が神に栄光を帰し、イエスキリストを証人として伝えるためであることを意味し、教えてくださっています。

2. 昇天されらイエス様からいただいた使命に焦点を合わせましょう。

本文の9節に“こう言うてから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。”イエス様は弟子たちに新しい使命を与えて父なる神様がおられるところにみなが見ている間上げられます。上げられるイエス様は雲に包まれて、見えなくなられたと書かれています。

ここで“雲”というのは自然現象としての雲だったのか、神様の特別な摂理としての雲だったのか正確には分かりません。しかし、旧約聖書において雲は神様の栄光と臨在を象徴しました。

たとえば、出19:16(三日目の朝になると、山の上に雷といわずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。)で神様がシナイ山に臨まれたとき、密雲の中で臨まれ、歴代第二5:13ではソロモンが聖殿の建築を終えて契約の箱を聖殿に移ったあと神様に賛美をささげるとき、“主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。”と書かれています。これは神様が臨在する姿を雲で表しました。そして、新約聖書ではイエス様とペテロとヨハネが高い山に登られた時光り輝く雲が人々を包み、(マタイ17:5, マルコ9:7, ルカ9:34-35),そして、イエス様が再臨される時雲に乗って来られると予言されました。(マタイ24:30, マルコ13:26)

ですから、本文の雲も神様の栄光と臨在を表しているのだと理解すれば良いと思います。大切なのは神様が臨在される時光り輝く雲が表されたようにみなさんの日々の生活において、毎週の我らの礼拝においても神様の栄光とご臨在の雲に包まれます時となりますようにお祈り申し上げます。

本文の10-11節に“イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」”イエス様の十字架の死も、イエス様の復活もイエス様の弟子たちにとっては本当にショックだったと思いますが、復活されたイエス様が自分たちの目の前で天に上げられる姿をみながら、どんな心境だったのでしょうか。きっとあぜんとして立ち尽くすしかなかったと思います。自分たちが今まで仕えて来た方が本当の神様であったことを確認された時のその気持ちは感激そのものだったのではないかと思います。しかし、ただ天をみあげてぼっとしている弟子たちに二人の天使が“ガリラヤの人たち”と呼びかけました。弟子たちがしばらく忘れていたことは彼らはもともとガリラヤの人たちだったことです。どんなにすばらしい体験をし、どんなにすばらしい約束をいただいたとしてもほかの人からみれば彼らは何も変わりがないガリラヤの人たちだったのです。どうせ、呼びかけるなら“イエスの弟子たちよ。”“使徒たちよ!”“イエスの証人たちよ!”と呼んでくれてもよかったのに。。。そのように呼ばれないで“ガリラヤの人たちよ。!”と呼ばれたのにはそこに深い意味があります。

自分は神様の前では卑しい存在であることを覚えなさいと言う意味があります。ガリラヤはイスラエルの一番北側にある田舎としてそんなに大切にはされてない町でした。しかし、もはや弟子たちは使徒として聖霊の力を受けて、イエス様の代わりに用いられる特別な人たちでした。しかし御使いが“ガリラヤの人たち!”と呼んだのは“あなたがたがイエス様の証人として、そして使徒になった後でも神様の前では卑しいガリラヤ出身であることを忘れないでいつも謙遜でありなさい”という意味として我々にも適用できると思います。他の人より特に仕事がうまくいけてお金をたくさんもうけたり、ほかの人より先に昇進したり、特に勉強が上手にできる時、もしくは他の人より教会の生活を長くしていることなど、自分がよくできる者だからではなく、なんの値打ちもない自分に神様が恵みとして力をくださったゆえにそうされたのだと受け取らなければなりません。ほかの人々との関係において問題が生じる理由の一つは自分が取るに足りないガリラヤ出身であることを忘れてしまうからです。神様の御前で自分はガリラヤ出身であったことを忘れてしまって、高慢になり、相手が自分よりものたりないのだと思って無視してしまうので問題が生じるのです。自分も弟子たちのように、なんの値打ちもない者なのに、イエス様が呼んでくださって、使命を与え、聖霊の力と知恵と信仰を与えてくださったゆえにうまくいくようになったということをいつも覚え、謙遜に仕えなければなりません。

ガリラヤの人たちと呼ばれたのはイエス様を離れては自分は何もないという意味です。弟子たちはイエス様とともにしながら力ある御言葉を聞き、くすしい奇跡を体験し、自分で悪霊を追い出す体験までさせていただきました。そして、栄光に満ちたイエス様の昇天も特別に目撃しました。しかし、イエス様が彼らを離れることにより彼らはただのガリラ

や人に戻ったと言うことです。我々は客観的な自分の姿を忘れるときがあります。ですから、我々はイエス様を離れてはなにもないものであることを覚えて、なんとかしてイエス様と一緒に歩む人生となるように願い、求めるべきだと思います。

そして御使いは“なぜ天を見上げて立っているのですか。”と言われました。反面弟子たちは復活されたイエス様に再び出会ったとき、ようやくイエス様がイスラエルの王となられてローマの殖民から自分たちを救ってくださると期待していたかも知れません。ところが、イエス様は自分たちの期待にはまったく応じてくださらず、昇天されてしまったのでなんだか複雑な気持ちで天を見上げていたと思います。これは弟子たちが持つべき関心事は“イスラエルの国の回復”ではなくイエス様から命じられた使命つまり、聖霊に満たされ地の果てまでイエスキリストの福音を伝えることである意味です。言い換えると“あなたがたに任せられた使命の座に戻りなさい。”あなたがたがやることのあるのになんでぼっとしているのかという意味です。

愛する信仰の家族のみなさん！大切なのは我々はみなイエス様から任せられた使命の場があります。主婦は家庭のことをしっかりする使命があります。職場の人々は職場の生活を誠実に、学生は勉強を熱心に、自分の生活の領域においてキリストを証し、クリスチャンらしく生きる使命があるのです。

3. 再び再臨されるイエス様を待ち望みながら準備する事に焦点を合わせましょう。

“イエスは天に上げられたとおりに再び来られる”と言われました。なぜイエス様はふたたび来られるのですか？人々をこの世でどのように生きたのか裁かれるために来られます。伝道者の書12:14で“神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。”、第二コリント5:10ではなぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。”

もし、イエス様がふたたび来られて善悪のさばきをされないなら、我々には悔しいことがたくさんあると思います。しかし、神様は義なる方ですので、かならず、公平に、正しく裁かれると信じます。

すると、イエス様はいつまた来られますか？マルコ13:32に“ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。”と言われ、第一テサロニケ5:2に“主の日が夜中の盗人のように来るといふことは、あなたがた自身がよく承知しているからです。”と言われました。みなさん！盗人が予め、予告して来ないのと同じようにイエス様の再臨も突然されるということなので、いつも準備して待たなければなりません。これを言い換えると神の国と福音を証することのために働き、仕える機会はあるわけではないので、機会のあるかぎり仕え、献身するようにと求められている意味だと思います。

再び来られるイエス様はどうやって来られますか？本文の11節に“そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」”これには3つの意味があります。一つ目は栄光の中で来られるという意味です。

大体の異端の首領（しゅりょう）たちは自分を再臨のイエスといい、イエスがこの世に生まれたとき、迫害を受けたように自分も迫害を受けるのだと言います。しかし、再臨されるイエス様は迫害を受けるために来られるわけではなく、軟弱な人間の姿ではなく栄光と力に満ちた姿で裁きのために来られます。ですから、“あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります”と言われたのは初臨のイエス様はみすばらしく来られましたが、再臨されるイエス様は栄光の中から来られるとのこと。そういうわけで第一テサロニケ4:16では“主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。”

二つ目はすべての人々が見ている中で来られるという意味です。これをマルコ13:26では“そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。”といい、黙示録1:7では“見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。”と言われました。

これはイエス様の再臨というのはどこかのすみっこではなく、なんにんかの少数だけにではなく、この地球にいるすべての人々だけのみならず、すでに死んだ者もみな生き返ってみなが見ている中でなされるということです。

イエス様の再臨がすべての人々の見ている中でなされるということはマタイ24:5で“わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。”とあってイエス様の再臨についてかならず、偽者が現されるのでだまされないようにあらかじめ教えてくださっているのです。

とっても残念なのは異端研究所の資料によると統一教のムンソンミョンを含め、新天地など、自称再臨のイエスだと言っている人が70人も超えているのだそうです。一言で言うと彼らはみな偽者です。

なぜなら、彼らが生まれるとき、イエス様が昇天されるときように雲に乗っても来なかったし、我々はそれを見てもいないからです。ですから、イエス様の再臨の時が近づいてこればくるほど、このような異端がもっと増えるはずなので、惑わされないように目覚めて祈り、気をつけなければなりません。

三つ目に、イエス様は突然、来られるという意味です。これをマタイ24:43-44では“しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしようし、また、おめおめと自分

の家に押し入れられはしなかったでしょう。44 だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。”と言われ、第二ペテロ3:10では“しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。”と言われました。イエス様の再臨は自分が知らないうちにある日、突然なされることなので、我々はいつもイエス様の再臨のために準備しなければなりません。なぜなら、イエス様はかならず、また来られるからです。

本文で御使いたちが“天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります”といわれただけではなく、イエス様がヨハネ14:2-3で“わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。”と言われたからです。

そして、聖書にはイエス様の再臨について1,560回も予言されたので、イエス様の再臨はかならず、されるでしょう。ですから、私たちの側としてはふたたび来られるイエス様を迎え入れる準備をして、待つべきではないかと思えます。どうやってですか。 **自分が与えられた主の使命を行ったとおりに裁きを受けることを考え、イエス様の御前に立ったとき、恥ずかしくないように今を生きることこそがイエス様の再臨を準備することではないかと思えます。**

“明日、世の週末を迎えても今日一本のりんごの木を植えよ。”という姿勢を持ちましょう。ぼんやりしていた自分の焦点、乱れていた自分の焦点をもう一度イエス様に合わせましょう。イエス様の証人として生きるために、力を尽くして自分に任せられた使命と責任を果たせましょう。そして、いつでも主の御前に立たされる日を待ち望み、日々祈りをもって目を覚まして準備して行くみなさんとなりますよう主イエスの御名によって祝福します。アーメン!!!